1.

白山が上野から金沢に向かって走っている途中、大宮駅を出てすぐに、完成した新幹線の高架が目に入ってくる。

既に営業列車を使っての試験を行っているそれは、今はまだ静かに開業を待っていた。この高架の上を乗客を乗せた列車が走る時、それははくたかが白山の前からいなくなる時だ。

真新しいコンクリートで作られたそれを、白山は忌々しげに見上げた。見たくないと思っても、大宮を出て暫くの間はこの高架と併走しなければならない。

それでも全て併走というわけではなく、高架は一旦は白山の前から姿を消す。そして信越線と上越線の分岐駅である高崎駅の少し手前で、再び姿を現すのだ。

イライラした気持ちのまま高崎駅に滑り込むと、高崎線下りホームに特急車両が止まっているのが目に入ってきた。ヘッドマークは、グリーン色の背景に白い鳥が描かれている。上越線の特急「とき」だ。

ときとほぼ同一の区間を走るはくたかと違って、白山はときと特別な付き合いは殆ど無かった。向こうから声を掛けられたこともなかったし、白山から声を掛けたこともない。お互い、存在は知っているけれど特段仲が良いわけではない、という関係を保ち続けていた。

その日も特に気にすることなく白山が乗客の乗降を確認していると、ふと視線を感じた。何だろうと思って振り返ると、向こう側のホームにときが立っており、明らかに白山の方を見ている。

何かおかしな事をしただろうか、と白山もときの方を見ていると、その事に気付いたらしいときが軽く会釈してきた。

会釈を返すならば、そのまま頭を軽く下げればいいだけのことだ。しかし、白山にはそれが出来なかった。突然の事というのもあったが、何より白山はときの事を良く思っていなかった。何故なら、はくたかとほぼ同じルートを走っているというのに、一人だけ新幹線に昇進するからだ。

半ば逆恨みな感情だと自分でも分かっているのだが、その時の白山は、誰かを悪者にしなければとても耐えられるような心理状態でなかった。

どうしてはくたかは廃止で、ときは新幹線に昇進出来たのだろう。はくたかに新幹線になって欲しかった訳ではないが、例え一往復に戻ったとしても――それはそれではくたかは悲しむかも知れないが――、特急として金沢に残って欲しかった、というのが白山の素直な気持ちだった。

考え方を変えれば、ときだって廃止になるだけという事も十分考えられたのだが、そこまで深く考える余裕は無かった。だから、そのままときに対して会釈を返すことが出来なかった。

ときは会釈もせず、厳しい視線で自分の方を見ている白山の表情を見て、一瞬表情を強張らせたようだったが、すぐにその表情を隠し、くるりと背を向けた。同時に発車を告げるベルが鳴り、先に下りのときがホームを離れていった。続いて白山が停車しているホームの発車ベルが鳴り響き、白山も慌てて車内に乗り込んだ。

遠ざかっていく高崎の街並みを横目で見ながら、先ほどの態度を改めて反芻する。いくら気に入らないとはいえ、大人げない態度であったことは確かだ。今度もし顔を合わせることがあれば、その時はきちんと今日の非礼を詫びよう、と白山は思った。

高崎から横川までの距離は短い。すぐに街の姿は進行方向後方に流れ去り、広い水田が連なる間を駆け抜ける。まだ田植えには早い季節だが、既に水田にはたっぷりと水が張られており、苗を受け入れる準備は着々と整えられているようだった。水が張られ、鏡のようになった水田には、青い空や周囲の山の形が映し出されている。

山に向かって走って行くと、徐々に風が冷たくなってくる。この冷たい空気を感じると、もうすぐ碓氷峠だと気が引き締まる思いがした。

程なくして横川に着いた白山は、機関士達が白山の車両とエフの機関車の接続作業を行っている間、ホームの端で煙草を吸うエフと無駄話をする。僅かな時間ではあるが、最近の白山にとって唯一心休まる時間だった。普段ならばはくたかの隣が一番気が休まるのだが、今はどうしても、はくたかの引退のことを考えてしまうから、少し辛かった。

その日はどうも本腰が入らず、協調運転もいつもに比べて芳しくない出来だった。もちろん無事に走りきったことに変わりはないけれど、半端が許せないエフは軽井沢に降り立つや否や、白山を運転席から引きずり出して怒鳴った。

「しっかりしろよ！お前がそんな状態だとはくたかさんだって困るだろうが。辛いのは分かるけど、今は乗客を

安全に金沢まで送り届けることに集中しろ」
　エフの言葉は全て正当なもので、白山も自分が悪いことは分かっていたので、素直にごめん、と謝る。すると、今度は心配そうな顔をして、エフが言った。
「……なにかあったのか？アレより酷いことか」
　エフが言うアレとは、はくたかの廃止の事だ。そんなんじゃないけど、と言う白山の口調は歯切れが悪い。何故なら、高崎でのときとの出来事を、エフに話すかどうか迷っていたからだ。素直に話せばそんなことを気にするなんて馬鹿だな、と言われるだろうし、加えて自分の態度が悪かった事も分かっているから、余計に言い出しにくい。が、もやもやとした気持ちを素直に吐き出せる相手も、エフ以外に考えられなかった。
「さっき、高崎駅でさ」
「高崎？何だ、ときにでも会ったのか」
「どうして分かったんだ!?」
「何となくそんな気がしたんだが、まさか図星とはな。で、それがどうかしたのか？」
　新しい煙草を取り出して口に咥えたエフは、器用にマッチを擦って火を点けると、煙草に近づけた。マッチの燃える独特の匂いに加えて、煙草の匂いが鼻を突く。
「僕に向かって会釈してくれたんだけど、咄嗟のことでどうすればいいのか分からなくて、そのまま棒立ちに……」
「なるほどな。確かにお前らしいな。と言うか、そんなことで悩むなんて、どれだけ堅物なんだ、俺の相棒はさ」
「堅物って、そんなこと無いと思うけど」
「どうだか。俺に言わせれば十分堅物さ。まあ、その方がお前らしいよ。何たって信越本線を走るエリート特急なんだから」
「エリートって言われたって、結局あれから三往復以上増える気配もないし、もう誰もそんなことを思っちゃいないよ」
「いや、少なくとも俺は思ってるぜ？」
　ニヤリ、と笑ってみせるエフを小突いて、君は馬鹿だと言ってやった。もちろん本気の発言であるはずがない。それをエフも分かっていて、白山の発言に笑っている。
「さて、仕事仕事。俺たちに出来るのは、乗客を安全に目的地まで運ぶことだけだ」
　ひとしきり笑った後で、エフが真顔に戻ってそう言った。短くなった煙草を灰皿に押しつけると、シガレットケースとマッチを胸ポケットに仕舞い、ほら、行くぞと白山を追い立てた。それに従って白山は自分の場所に戻る。

上野から金沢という長い距離のうち、エフと一緒に走るのはほんの僅かな距離だ。それでも、この場所は白山にとって掛け替えのない場所であり、全ての始まりの場所だった。

「ほら、行ってこい」

エフの声が聞こえて、とん、と背中を押された気がしたが、そこにエフの姿はなかった。恐らく機関車の取り外し作業に忙しいのだろう。親友に心配を掛けてばかりはいられない。夏に向けて徐々に濃さを増す山の緑に目を細めながら、白山はそう思った。

❖

同じ日の夜、はくたかは休憩室へ向かっていた。

「あれ？」

今日の運転日報を書こうと、必要な書類を持って休憩室にやってきたはくたかは、目の端を過ぎった白い陰に一瞬身体を強張らせた。が、すぐにその正体が分かり、溜息を吐いて部屋の明かりのスイッチを入れる。

休憩室には誰もいなかったが、窓のガラスが一枚開いたままになっており、そこから吹き込む風に煽られてカーテンが揺れていた。このカーテンが先ほどはくたかが見た白い陰の正体だったというわけだ。

「ちゃんと閉めて欲しいなあ」

肩を竦めて窓際に近づいた。吹き込む風はそれほど強く無かったが、予想以上に冷たくて、一瞬にして鳥肌が立った。春と言えども夜はまだ寒い。これが爽やかな風だと感じられるようになるのはもう少し時間が必要なようだ。

窓ガラスを閉め、施錠したことを確認したはくたかは、本来の目的だった日報を書く作業に戻ろうとした。が、今度は入り口から誰かが入ってきた気配がして、その人に気付かれないよう軽く溜息を吐く。

「はくたか、ここにいたのか」

「……雷鳥。どうしたの」

部屋に入ってきたのは、眉間に皺を寄せた雷鳥だった。この男は機嫌が悪くないときでも眉間に皺が寄っていることが多いので、いつも怒っているように見えるという損な所があった。もう一人のリーダーであるしらさぎの物腰の柔らかさを見習えばいいのに、と時々はくたかは思う。

しかし今日の雷鳥は、本当に不機嫌なようだった。はくたかの問いには答えず、窓際に立っているはくたかの方へ近づくと、ぐい、と手を掴んできた。予想外の動きにバランスを崩したはくたかは、半ば雷鳥の方へ倒れ込むような格好になる。
「……ごめん」
慌てて身体を離そうとするが、手首を掴まれたままでは思うように動けない。
「お前、また食事取ってないだろ？」
雷鳥がじっと見ているのは、はくたかの手首だ。それは雷鳥の力強い手のひらにすっかり収まってしまうほどの太さしかなかった。
「食べてるよ。雷鳥だって食堂にいるところ見たことあるだろう？」
「それだって、大分量を減らしていると聞いた。どうしたんだ一体」
「別に、何も。単に食べたくないだけで」
「食べなければならないことくらい、分かっているはずだ」
はくたかの言い訳に全て反論を返す雷鳥に、はくたかは苛立ちを覚えた。
雷鳥多言うとおり、食事の量が減っているのは事実だ。廃止の事を考えるとどうも胸が重く、食欲が沸かない日が多かった。だから食堂のおばさんに頼んで、一時的に量を少なめにしてもらっていた。
それでも、運転に必要な体力を維持する為に必要最低限の食事は食べているつもりだった。だから放っておいて欲しかったのだが、雷鳥は一度気になったことは納得するまで追求してくることが多い。これ以上追求されるのならば、いっそ廃止のことを言ってしまおうか、とも思った。が、中途半端に話をすることは、余計に騒ぎを大きくするだけだ。
離してくれ、と雷鳥の手を無理矢理振り解く。雷鳥は黙ったまま、はくたかの方を見た。
「……特急のリーダーという立場にある以上、他のメンバーの健康状態に気を遣って何が悪い」
「別に悪いとは言っていないよ。ただ、私は別に君が心配しているような事は何も」
「本当にか？何か悩んでいるんじゃないのか？」
思わぬ所からの直球的な問い合わせに、はくたかはつい言葉を途切れさせた。が、言葉の変わりに首を横に振って何とかその場を繋ぐ。動揺を悟られてはいけない、と自身に言い聞かせながら。
「ここに来たときのお前は、そんなに細い腕じゃ無かっ

ただろう!?」
「そうだったかな、もう忘れたよ」
「俺に出来ることなら言って欲しい。俺は、お前の力になりたいんだ」
「雷鳥……有り難う。その気持ちだけでも、私には十分だよ」
　そう言ってはくたかは、雷鳥の脇をすり抜けて机の上に置いたままとなっていた日報書類を手に取ると、休憩室を出て行こうとした。が、背後から雷鳥に呼び止められ、足を止めた。
「はくたか。俺はお前の味方だからな！何かあるならちゃんと言え。考えていることを直接読み取れるようなやつはいない。口にしなければ分からないんだ」
「うん……分かっている」
　こんな状態では休憩室で日報を書くことは不可能だと判断したはくたかは、一度宿舎に戻ることにした。提出の為にまた駅まで戻ってこなければならないのは面倒だったが、自室ならば誰にも邪魔されずに書くことが出来る。
　宿舎への道を歩きながら考えていたのは、先ほどの雷鳥とのやり取りだった。雷鳥は過剰な程はくたかの事を気に掛けてくれている。本人に言わせれば、最初にやって来た後輩だから、ということだったが、来たばかりの頃ならいざ知らず、特急として走り始めてもうすぐ十三年が経過しようとしているのに未だあの調子では、きっと雷鳥の中でずっとはくたかは「頼りない後輩」のままなのだろう。
　確かに本数も雷鳥に比べればかなり少ないし、エル特急でもない。それでも、職務を全うしようと今まで頑張ってきたのだ。少しは後輩という立場ではなく、同じ特急の同僚として見て欲しいと思うのは身に過ぎた願いだろうか。
　雷鳥の気持ちが時々重いと感じるのは、きっと考え方の違いからくる感情なのだろう。はくたかは先ほど書き損ねた日報用の書類を持って自室に戻ると、それまでのもやもやとした考えを何とか頭の中から追い払い、しばしその執筆に集中することにした。